

—イザヤ35章・1-6a、10、ヤコブ5章・7~10、マタイ11章・2-11—

〔そのとき、〕ヨハネは牢の中で、キリストのなされたことを聞いた。そこで、自分の弟子たちを送って、尋ねさせた。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」イエスはお答えになった。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである。」ヨハネの弟子たちが帰ると、イエスは群衆にヨハネについて話し始められた。「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。風にそよぐ葦か。では、何を見に行ったのか。しなやかな服を着た人か。しなやかな服を着た人なら王宮にいる。では、何を見に行ったのか。預言者か。そうだ。言うておく。預言者以上の者である。『見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、／あなたの前に道を準備させよう』／と書いてあるのは、この人のことだ。 —マタイ3章—

### 待降節第3主日

#### 「荒れ野に花をさかせよ」

待降節は、光を求めて闇を進む旅人のイメージです。それはマリアに最もふさわしい季節であり、マリアを母と慕う信仰者にも、その恵みに預かる喜ばしい季節です。

マリアの旅とは、御子を迎えるに急ぐベツレヘムへの旅であり、私たちの受ける恵みとは、「約束の地」に入る道、その生き方を、御子とともに示しておられることです。

聖アンブロジオは言います。「私たちは、みんなマリアにならなければならない。しかし、誰もマリアになりたくない」と。マリアは主のはしためとなつて「自分の思い」を控える謙遜の人です。その子イエスも母と同じように「自分の思い」でなく、父の心の実現のために、不忠実な民に代つて荒れ野で40日の断食の末、三つの試練を経て父のみ心を成就された御子。このお二方は「自我」に死んで、

御父の言葉に聞き従う事こそ、み国に入る「信仰の人」であると、自己保身、自己中心性の私たちに教えておられるのです。

み母に同伴する旅が時に、荒れ野を迂回する旅となる時、私たちの信仰はその時、問われることになるでしょう。便利さと快適さに浸りきつてきた私たち現代人に荒れ野がどのように映るのか？ かつて民が「肉鍋を腹いっぱい食べられた奴隷時代の方が良かった」と泣き言で神を怒らせたあの荒れ野の貧しさが！

すでに世には、後ろを振り向きたい誘惑が始まっているようです。世界情勢の影響下、物価上昇に悲鳴が聞こえ始めるや、国は現状維持最優先策で又もや、かの原発再稼働が動き始めたのです。

私たち信仰者は今、地球温暖化危機の中、何を見に、荒れ野で叫ぶヨハネの声を耳にしたのでしょうか。聖母子の待つ貧しい馬小屋？ それとも貧しさを厭う快適な暮らし？

貧しさは、それを受容できない人には悪としか捉えられないのが世の価値観ですが、信仰の力で受容していく人には、十字架をくぐり抜けて復活に至る恵みとなるのです。造られたものはすべて良かった、を信じる者には、すべて神から頂いたものと受容する時、災いでさえも恵みに変わるといふ信仰があるからです。

俗に、「頭では分かっているが体が言う事を聞かない」のは、その人の生き方を方向づけているのが、その人の価値観だからです。ここに価値観の回心が命の完成のために必要となります。 “すべては良かった” が信じられず豊かさに浸りきつた現代人に「死」以上に厭われているのが「老い」と言われる昨今、キリスト者は死や老いも恵みと変わる「受容の霊性」がマリアさまの生き方にあることをしっかりと受け止めたいものです。「空の器」に聖霊が豊かに注がれて荒れ野に花を咲かせる降誕祭が迎えられるために。